

長野県で見つかったトウノウネコノメ

上野勝典* 上野由貴枝*

Chrysosplenium pseudopilosum Wakab. et Hir.Takah. newly found in Nagano prefecture

Katsunori UENO and Yukie UENO

I はじめに

ユキノシタ科ネコノメソウ属は主に北半球の温帯から亜寒帯に分布し約55種が知られ、日本には14種10変種ある(大場1982)。長野県には13種5変種知られている(大塚1997)。2007年4月、天龍村の溪流沿いの植物を観察して歩いていたときに見慣れないネコノメソウ属植物が小さな群落を作っているのを発見した。葉の様子や萼片が、萼裂片が開かず釣鐘状の形をしてキバナハナネコノメ *Chrysosplenium album* やコガネネコノメ *C. pilosum* var. *sphaerospermum* にもやや似ており、両者の雑種ではないかというのが初めて見たときの印象だった。その場で同定ができなかったため、写真で記録をとり標本を採集した。良く調べてみると1999年に発表されたトウノウネコノメ *C. pseudopilosum* Wakab. et Hir.Takah. とわかった。長野県新産となることから、自生状況と特徴について報告する。長野県で見られる類似種のキバナハナネコノメとコガネネコノメ(それぞれ以下ではキバナ、コガネと略記)との比較という形で特徴を述べることにした。ただし、1ヶ所でのみのトウノウの観察によるものであることをはじめにお断りしておきたい。

II トウノウネコノメについて

トウノウネコノメ(以下トウノウと略記) *Chrysosplenium pseudopilosum* Wakab. et Hir.Takah. は、岐阜県土岐市を基準標本産地として、1999年に新種として発表されたものである(若林・高橋1999)。また、京都に産する植物は、花がやや大きく、萼の背軸側に毛が散在(トウノウでは無毛)することなどから、トウノウの新変種ヤマシロネコノメ var. *divaricatistylousum* Wakab. et Hir.Takah. と命名された。若林・高橋(1999)によれば、分類学的にはシロバナ

ネコノメとツクシネコノメの間をつなぐ分類学的位置をもつものと推定されており、その特徴は

- 1) 萼は緑色で釣鐘状、
- 2) 萼片は先が円形またはやや切頭形で萼筒とほぼ同長、
- 3) 雄ずいとは花柱は萼片から突出

などとされている。岐阜大学の高橋弘氏から、自生状況の写真によって今回発見したネコノメソウ属植物はトウノウと同定された。

標本：天龍村満島(上野勝典・上野由貴枝 s.n.2007年4月1日 NAC143999)

III 自生地の状況

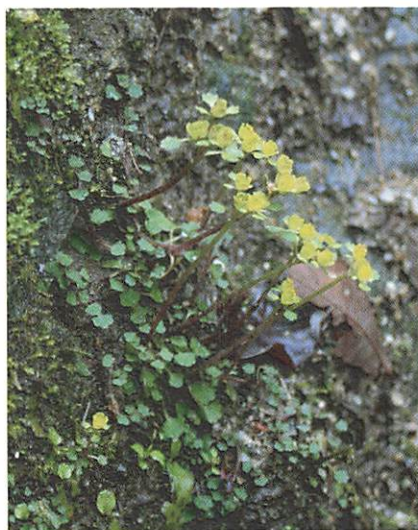


写真1 トウノウネコノメの群落

自生を確認したのは4月1日で、開花した状態であった。写真1に全体を示す。今年は2月から3月上旬の気温が高く、サクラの開花が例年よりも早かったものの、その後の低温によって、4月中葉以降は植物

* 上野勝典 〒399-0011 松本市寿北2-2-38

の開花はほぼ平年並みに戻っているように感じた。おそらく、例年でも3月末には開花しているものと予想される。今回見つけた場所は、比較的岩場の多い北に面した急な溪流で、周囲はスギ、ヒノキが植林されている。自生地の周囲だけは、急斜面のため植林されておらず、落葉広葉樹の樹木が生えていた。自生している斜面は北西向きで、岩場の上部から水が流れており、常に湿った環境にある。キバナは増水すると水に浸かりそうなくらい水面に近い岩場に生育するが、今回見たトウノウはそれよりは、やや流れから離れた湿った岩場に自生していた。トウノウが見られた範囲は横10m 高さ10m 程度の極めて狭い一部の岩場で、周囲を探したが、上流側の小さい岩の陰に小群落を見つけたほかは確認できなかった。地面を被うように葉を広げているため個体数を確認するのは困難であったが、花茎の数では、全体で200本程度であった。ネコノメソウのほかにはハルトラノオくらいしか出ているものは見当たらなかった。4月30日に実を確認するために再来したときには、他にも開花中の植物が見られ、すぐ近くで観察された植物はツヤナシイノデ、ツルテンダ、イヌシダ、オウレンシダ、キヨタキシダ、クジャクシダ、ウワバミソウ、ホトトギス類、イワタバコ、ヤマアジサイ、フクオウソウ、イワボタン、ツルネコノメ、ヒロハコンロンソウ、ミカワチャルメルソウ、ワサビ、ツルキンバイ、ミヤマハコベ、チドリノキなどで、溪流でよく見られる植物がほとんどであった。若林・高橋（1999）による産地と、吉田豊氏から得た

情報で作成した本種の分布図を図1に示す。変種のヤマシロは京都府に分布するとされている。トウノウはこれまで、愛知県、岐阜県で知られていたが、今回長野県でも分布することがわかり、キバナのように東海地方が分布の中心になっているようである。ただ、今後広く認知されてくれば、新たな自生地が報告され、分布状況が明らかになっていくものと期待される。

今回の自生地は、急な溪流沿いの不安定な環境にあり、自生地も極めて狭いため、わずかな環境変化で絶滅してしまう危険性があり、長野県の絶滅危惧種に相当する植物である。

IV 植物体の特徴

キバナとコガネに似ているとされるため、両者との比較を中心に、観察した植物体の特徴について報告する。

萼裂片がキバナのように広がらず、また裂片の先が丸くならず、直立して釣鐘状となる。その点ではや



写真2 トウノウネコノメの花

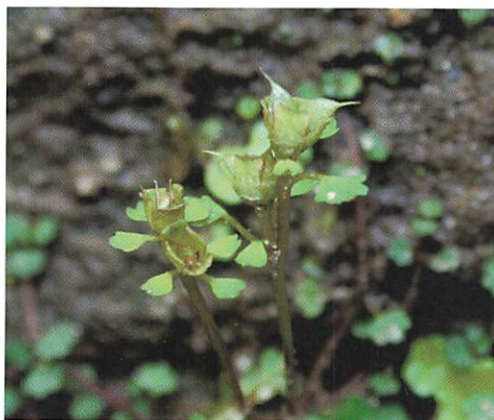


写真3 トウノウネコノメの実



図1 トウノウネコノメの分布。●は若林・高橋（1999）および、吉田豊氏からの私信による岐阜県、愛知県におけるトウノウの産地。○は今回報告する長野県内のトウノウの産地。

やコガネに似ているが、直径が4 mm 程度と大きく、また萼裂片の先端が外側に反り返る傾向があるように見える。コガネの萼裂片はやや内側を包むように緩やかに曲がっている。著しい特徴は雄ずいと花柱がともに萼裂片から大きく飛び出している点で、ハナネコノメやキバナに似ている。ただし、これは個体によってやや差があるようで、中には雄ずいの長さはあまり長くなく、萼裂片と同長程度のものもあった。このような個体はコガネの少し花の大きな個体のように見えなくもない。ヤマシロは若林・高橋 (1999) によれば、萼の背軸側に毛が散在しており、花の直径もトウノウよりも大きく4.6mm 程度となっている。

約1ヶ月後の4月30日に実を観察した。若林・高橋 (1999) によれば、さく果の2花柱の間の角度が、トウノウでは50~80°と直角よりも狭く、一方ヤマシロでは140~180°と広い、としている。しかし、観察した範囲では、実の熟す時期によって、初期には90°より狭いものもあるが、140°以上もあるようなものが多数見られ、この点を同定のポイントとするのは困難なように思われた。同時期に観察したキバナの実はどれも90°よりも狭く、また花柱の先端はのぎ状によく伸びていた。



写真4 トウノウネコノメの葉

全体に軟毛がある点では、コガネやキバナと同じだが、コガネと比較すると、茎の色が赤紫色で、葉はやや黒っぽい緑色で、鋸歯は3から4裂ほどと少なく、また大きさも小型でキバナの方によく似ており、葉だけのときにはコガネとは区別が可能だが、キバナとの区別は困難である。葉の鋸歯はキバナよりもやや浅めで、葉面の毛もより短い印象だった。葉は対生だが、花茎の途中に付く葉はときに1つしかつかないものがある。キバナと比較すると、キバナの花茎は地上を這う茎と同程度の0.5mm 程度と細く全体として華奢な

印象を受ける一方で、トウノウの花茎は直径1 mm 近くほふく茎の2倍程度と太くてがっしりとしている。キバナは花をつけない葉は岩を被うようにマット状に広がっており、葉はやや立ち上がって立体的になっているが、トウノウは地面に近いところを被うように広がっている。これは種の特徴というよりも自生環境と関連しているかもしれない。

V 最後 に

個体を見比べてみると、全体として葉はキバナに似ており、花はどちらかといえばコガネに似ているが雄ずいや花柱が萼裂片から飛び出ている、一見してどちらでもないことはすぐにわかるので、区別は比較的容易なように思った。今回、長野県で発見されたトウノウネコノメについて報告したが、今後本種が一般に認知されてくれば、県内でもさらに見つかるのではないかと期待される。

VI 謝 辞

本報告の作成にあたり、貴重な助言をいただきました長野県環境保全研究所&ハーバリウム (NAC) の大塚孝一氏には、心より感謝いたします。トウノウネコノメの同定をしていただきました岐阜大学の高橋弘氏には心より感謝いたします。

また、貴重な資料や情報の提供をいただきました、金沢大学の須山知香氏、豊橋市の吉田豊氏をはじめ、豊橋ボタニスト倶楽部の皆様には心より感謝いたします。現地での観察に同行していただきました、加藤範夫氏には心より感謝いたします。

VII 参考文献

- 大塚孝一 (1997) ユキノシタ科 清水建美 (監修)
(1997) 長野県植物誌, 639-655. 信濃毎日新聞社.
大場秀章 (1982) ユキノシタ科 佐竹義輔他編
(1982) 日本の野生植物 草本II 離弁花類, 153-172. 平凡社.
長野県 (2002) 長野県版レッドデータブック. 維管束植物編.
若林三千男・高橋弘 (1999) 本州中部産ネコノメソウ属の一新種および一新変種. 植物分類・地理学会誌, 50(1): 1-11.